

## 階層・文化・地域間格差是正の可能性を探る ——北京崇貞学園の事例を通して——

李 紅 衛 (お茶の水女子大学人間発達教育研究センター)

近年、戦前日本の対華教育活動や事業に関する実証的な歴史研究はかなり進み、数多くの研究成果が蓄積される。しかし、これらの研究では、日本政府主導による対華文化事業の一環として位置づけられた諸文化事業を考察の対象とし、いわゆる国レベルでのものに焦点が当てられ、研究の主流となってきた。いうまでもなく、国を通じての教育文化交流は国際交流や平和教育に不可欠であり、その規模や影響力は無視できない。しかし、国レベルの教育文化交流だけでは、時代によってはその機能が働かなくなり、逆効果を生み出す場合もある。その典型的な例は、近代における日中両国の関係にいくらかでも見ることができよう。日中両国の教育文化交流も、時代の変化を反映するように、当初の協力関係から対立へと悪化の一途をたどり、遂には敵対関係にまで至った。そのため、近代における日本の在華教育文化活動は、日本の帝国主義の中国侵略を隠ぺいする「文化工作」や「奴隷化教育」に加担し、「文化侵略の先兵」であったと中国側に批判されてきた。

しかし、こうした厳しい日中関係が続くなかでも、従来日本政府や日本軍部の対中政策、大陸政策から一步距離をおいた民間人の活動も存在した。桜美林大学の創業者・清水安三による北京崇貞学園（1921-1945）での教育実践がその一例である。清水は、戦前の中国で民間人として日中両国間の教育文化交流を実践した数少ない日本人である。清水の思想は、日本による中国侵略を否定したり批判したりするものではなかったが、侵略とは一定の距離を置いており、またその教育活動は中国人や朝鮮人の人間性や民族性を一定程度尊重したものであったから、教え子や学園を知る現地の人々から高い評価を得て今も伝えられている。そのような清水という人物や、その教育活動を明らかにすることは、一方的な侵略や抑圧だけで語られがちだった戦前日本の対華教育活動や事業の研究に新しい側面を提示するのではないかとと思われる。また今日の階層・文化・地域間格差の問題を考える際に示唆をあたえるものとも考える。